

佳作

テーマ：誰かのために、わたしが出来ること 「生きるって、伝えるって」

栃木県立宇都宮東高等学校2年 鈴木真帆

ある日の授業中、献血希望者の呼び出しがあった。何気なくその光景を見ていた私だったが、教室を去る級友の数を数えて思わず目を見開いた。なんと三十九人の学級でたった四人だけだったのだ。あまりの少なさに私は衝撃を受けたと同時に、どうしようもない悔しさに襲われた。「なぜ献血をしないの？」私の頭の中ではその言葉がずっと巡っていて、もはや授業どころではなかった。

私は献血ができない。幼い頃患った病気の治療の一環として輸血をしたことがあるからだ。仕方がない——頭の中ではそう理解しているはずなのに、ひどくもどかしかった。言い方は少し大袈裟かもしれないが、もしあの時輸血をしていなければ私は今ここに存在していない。そう考えれば考えるほど、私は自分に血液を提供してくれた人々に心からのお礼が言いたい。そして、恩返しをしたい。献血によって救われる命がそこにあるのならば、私は何度だって献血に協力するだろう。しかし、実際は私には不可能なことなのだ。一度だけ、私は主治医に聞いたことがある。

「先生、私は献血できないのですか？」
答えなど既にわかりきった質問だった。それでもその時、私は少しでもこの現実に対抗してみたかったのだと思っ

「現在の医療では、輸血経験がある人は一生献血できないだろう」
やっぱり、とその時は笑って返したが、「一生」というその二文字が私の頭の中にこびりついて離れなかった。

献血をしない理由は人それぞれだと思う。針を刺すのが痛いから、面倒くさいから、そんな理由を想像していた時、こんな声を耳にした。「お母さんがね、採血時のショックで」くなる人もいるから献血をして

はダメだって」「一回献血したことがあるんだけど、もうやるなってお父さんから言われたの。若いうちから血を抜くのは良くないんだって」。これが真実なら、その血液をもらって生きている私は何なのだろう、そう思った。

私には友人たちの意見を否定する権利などない。しかし、そこにあるのはあくまで自分たちの都合だけであり、思いやりだとか助け合いの心は感じられない。もし彼女たちがその家族、恋人などの命を助けるために輸血が必要な状況に直面したらどうするのだろうか。また自分が生きるために輸血が必要になったら？きつと彼女たちは家族や恋人のために喜んで献血し、自分の命のために輸血を受けるだろう。これではあまりに都合がよすぎやしないだろうか。しかし、私は黙って唇を噛み締めることしかできなかった。

母はそういう私の苦しさを聞くと、私が輸血を受けた時のことを教えてくれた。「毎回輸血の度に承諾書を書かないといけないの。たかが輸血なんかじゃなくて、あなたにとつては命懸けだったのよね」。振り返ってみて思う。一度輸血の最中に腕が痒くなってどうしようもなかったことがあった。あの時、私の身体は命懸けで頑張っていたのだ。生きるために血液を受け入れようと必死だったのだ。

今、私の身体の中には、そんなたくさんの「思いやり」という名の血液が流れている。顔も名前も知らないけれど、献血に協力してくれた人々のおかげで私は生かされているのだ。そんな人々たちのために、献血のできない私には何ができるのか。考えたところで綺麗な答えなど見つからなかった。人にはそれぞれの考え方があり、献血を無理強いすることはできない。それでも私らしく、そう、少しずつでもいい、黙っていないでたくさんの人々に献血という名の手助けを呼び掛けていけばいいのではないかと思った。献血が一番身近な助け合い。そうした小さな活動を通して、人々が「生きる」ことについて少しでも考えてくれたなら、世界はもっと思いやりに包まれたものになると信じている。

輸血を体験した人にしか分からない、献血の大切さがある。そうしたら思いを伝えていくのが、今の私にできることなのだ。